

【特別招待講演1】 第26席

『難経』の脈法

中国・済南 柳長華

『難経』は『素問』『靈枢』に次ぐ中国医学の重要な原典であり、ある時代には<素難医学>と称されたほどに高い評価を受けた。中国では宋～明時代に多数の注解書があらわれ、日本でも十六世紀以降、近代に至るまで多数の注解書が著されたことはその証である。特に日本の場合、一九四〇年代に伝統的鍼灸が復興した時、その理論形成に重要な役割を果たした。このように『難経』は歴代の医学に大きな影響を與えてきた重要な古典であるにもかかわらず、その内容の検討は、あまり進んでいないように思われる。また、『難経』の研究には『素問』の場合と同様の事情が存在している。すなわち『難経』の研究は歴代の注釈を無視して進めることはできない。他方、各注釈はそれが書かれた時代の前提と問題意識で書かれている（たとえば『難経本義』は元明間の医学的風潮を前提としている）。したがって私達が『難経』の内容検討を行おうとする場合、経文と注釈の関係、あるいは『難経』における注釈の意味は、今ひとたび考えなくてはならない問題である。

柳長華先生は現在、『難経』の本格的研究を進めておられる。『難経』で論じられている内容は脈法、刺法、選穴法、五邪論、三焦論など多岐にわたるが、その中でも特に大きな問題は現行本『難経』の前半を占める脈法である。そこで以下のような点を考慮しつつ、最新の研究成果に基づいたお話をおうかがいする予定である。

- ①『難経』という著作の全体像と、その中での『難経』脈法の位置
- ②『難経』脈法の方法と診察内容（どのような方法があり、どのようなことが診察できるか）
- ③『難経』脈法と『素問』『靈枢』の脈法（特に人迎寸口診）との関係
- ④『難経』脈法と『脈経』巻第一所載の二十四脈状との関係
- ⑤『難経』脈法と『傷寒論』の脈法（特に平脈法、弁脈法）との関係
- ⑥『難経』脈法経文の内容と『難経』古注（呂広、楊玄操）の解釈・衍義

(文責：篠原孝市)